

(27) 見栄坊の鷺鳥・文学女性について（「或る反時代的人間の偵察行」の 27）

文学女性は「不満で、興奮して、心と内臓において荒み」、その組織の深みから囁く「子供か本か」という命令に痛ましいばかりの好奇心で耳を傾ける。彼女は「自然の声」がラテン語で語る時にも、そしてそれを理解するほど教養があっても、密かにフランス語で独り言を言うほどに「見栄坊で、鷺鳥」である。

(28) 「無私の者たち」の禁欲（「或る反時代的人間の偵察行」の 28）

「無私の者たち(Die Unpersönlichen)」が言う。「賢明で、忍耐強く、超然としている」こと以上に容易いことはない。われわれは「思いやりと同情」に溢れ、「不条理なまでに公正」で、「一切を許す」。それゆえ、時には「ささやかな欲情」を、すなわち、その「悪徳」を育てておくべきである。それによって、つらい目に遭うかもしれないし、それによって与えられる姿を笑うことになるかもしれない。ただ、それ以外に「自己克服」の別のあり方はない。これがわれわれの「禁欲」であり、「贖罪」である。かく「私的になること(Persönlich werden)」が「無私の者たちの徳」である。

(29) 完全な人間・官吏（「或る反時代的人間の偵察行」の 29）

あらゆる高等教育施設の任務は「人間から機械を作ること」である。そのための手段は「退屈」を学ぶことである。そこに達するのは「義務の概念」によってである。その模範となるのは文献学者であり、彼は「がり勉すること」を教える。「完全な人間」は「官吏(der Staats-Beamte)」であり、その「官吏」に「最高の方式」を与えるのはカント哲学である。「物自体としての官吏」が「現象としての官吏」の裁定者である。

(30) 疲れ切った労働者の芸術（「或る反時代的人間の偵察行」の 30）

現代は「労働の時代」、「帝国の時代」である。この時代に生きる疲れ切った労働者たちは「芸術」要求する。それには新聞雑誌や美しい自然、イタリアも含まれる。彼らは「夕暮れの人間(der Mensch des Abends)」であり、避暑や海水浴や氷河やバイロイトを必要とする。このような時代にあって「芸術」は「純粋な愚かさへの権利」有し、このことをヴァーグナーは理解していたのである。

(31) カエサルの保身術（「或る反時代的人間の偵察行」の 31）

ユリウス・カエサルが病気と頭痛からわが身を守った手段は、大行軍、最も簡素な生活、不断の戸外生活、絶えざる辛苦である。これが精巧で最高の重圧のもとで働く「機械」の極度の「傷つきやすさ」を守るための「保身術にして保護術」である。